

製石斧は胴部或いは基部の破損が多い。横刃形石器で硬砂岩が多いのは、打製石斧製作の際、剥片を利用したためと思われる。

Ⅱ群 乳棒状石器、磨石、石皿、凹石、蜂の巣石のグループで花崗岩、砂岩を中心とし一部磨石に緑泥岩がみられる。石皿を除いて破損していない。

Ⅲ群 石鏃、石錐は黒耀石、チャートを使用する。鋭利さを何よりも求めたことは云うまでもない。

以上、Ⅰ～Ⅲ群の様に町谷遺跡では石器の機能に応じて石材を選択している。なお黒耀石の剥片は比較的第2号・4号・5号住居址より多かった。全体では124片であり数量を明確に把握することは困難であり、むやみに数量化すると混乱の恐れもある為、表には載せなかった。

今後、この種の統計は剥片や土器の出土状態も合わせて考える必要があると思う。

#### ——飯島の弥生時代について——

今回の調査で弥生時代後期の住居址が2軒検出された。飯島町では、かつて昭和37年に高尾遺跡で弥生時代の住居址が1軒調査されているが、<sup>(1)</sup>今回の2軒を含めても3軒と少ない。今回の調査により飯島地区に於ける弥生時代後期研究の手掛かりができたと思われる。

伊那谷の弥生時代の遺跡の分布からみて、飯島地区はその分布が希薄である。これは当地区の地形に大きな原因があると思われる。弥生時代初めの遺跡は、山麓の湿潤地に多くみられるが、<sup>(2)</sup>稲作が行なわれるようになり遺跡は天竜川の氾濫原を臨む段丘上に立地するようになった。ところが飯島地区では段丘が天竜川右岸にまで迫り、左岸には伊那山地の山麓が続いていて、天竜川は深い溪谷となり南流している。このような地形の為に、当時の生活の場を山麓の台地へと選ばなければならなかったと思われる。

飯島町の弥生時代の遺跡は、極めて少ない。日曾利、高尾、岩間、本郷など数箇所遺跡が確認されているだけである。縄文晩期終末の遺跡として高尾第2遺跡、<sup>(3)</sup>うどん坂Ⅱ遺跡<sup>(4)</sup>があげられる。両遺跡とも山麓の沢あるいは湿地を臨む台地上に位置しており、東海地方の影響を強く受けている遺跡である。弥生時代中期の遺跡は確認されておらず、後期になり当遺跡、高尾遺跡、日曾利遺跡などで僅かにみられる。また古墳時代になっても遺跡は少なく、七久保、高遠原の山間部の台地、本郷の段丘上に僅かにみられるだけである。

上伊那地区においては、最近中央道、県営圃場整備事業がさかんに行なわれ、それにより弥生時代の遺跡が次々と発見され、当時の生活についても次第に明らかになりつつある。例

## 第Ⅴ章 町谷遺跡学習会

えば、辰野町樋口五反田遺跡<sup>(5)</sup>からは炭化米が検出され、また下伊那郡高森町出早神社付近遺跡<sup>(6)</sup>からは多くの石器が出土している。これらの遺跡は、いずれも十数軒で集落を形成しており、土器についてみても貯蔵用の壺、煮沸用の甕、祭祀用の高杯などと種類が豊富である。

これに対して当遺跡の場合、住居址は2軒であり、石器は、2軒の住居址を合わせて石庖丁が1点だけである。土器についても甕の破片が大部分である。樋口五反田遺跡や出早神社付近遺跡などに比べてあまりにも貧弱である。弥生文化を持った人々の生活の場として、飯島地区の地形は適さなかったのだろうか。

この問題については、今後上伊那、飯島地区の弥生時代の資料を待ち考えてみたい。

(註)

1. 上伊那誌編纂会「上伊那誌歴史篇」昭和40年
2. (1)に同じ
3. 伊藤 修 「高尾第2遺跡」伊那路17巻1号 昭和48年
4. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯島地区その3」昭和48年
5. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書辰野地区その1」昭和48年
6. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書高森地内その1」昭和47年